

Title	『清水物語』の出版をめぐる
Sub Title	On the publishing of Kiyomizu Monogatari
Author	柳沢, 昌紀(Yanagisawa, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.61, (1992. 3) ,p.52- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『清水物語』の出版をめぐつて

柳 沢 昌 紀

はじめに

寛永十五年（一六三八）に刊行された『清水物語』は、商業出版揺籃期の代表的ベストセラーとしてその名を知られている。寛永末年頃の刊行と思われる『祇園物語』の冒頭に「京やるなかの人々に、二三千とをりも売う申せし也」と記されているからである。しかしながら、『清水物語』の伝本調査、及びそれに基づく出版事情の検討は、これまでほとんどなされていない。

本稿は、私がこれまでに見ることのできた『清水物語』諸本の版種を分類整理し、各版の先後関係ならびに出版の経緯について考察するものである。未調査の本も多く、中間報告といふべきものであることを最初に一言お断り申し上げておきたい。

一 版種

『清水物語』には、每半葉十一行で大本二巻二冊の十一行本が四版と、每半葉十五行で大本挿絵入りの江戸版、十五行絵入本が一版ある。

十一行本四版は、いづれを見ても版式や本文丁数、字配り、字体に至るまで基本的に同じだから、うち一版が初版、他の三版が覆刻版という関係になる。ここで十一行本四版にA版、B版、C版、D版という便宜的な呼び名を与え、それらを更に、年記、書肆名記の違いや、板木が摩滅した丁だけ彫り直す通修の有無により分類すると、次のようになる。

(表1) 十一行本諸本分類表

版		分類	年記	書肆名記	通修	所	在
A		(A1)	寛永十五	敦賀屋久兵衛	ナ シ	①慶応義塾大学図書館「二一〇X/二三五」	
						②静嘉堂文庫「八四/四/一五九三二」	
						③天理大学附属天理図書館「九一三・六一/イ一一九」	
						④国立公文書館内閣文庫「一九三/五八〇」	
						⑤成城大学図書館「九一三・五一/A八九K」	
						⑥東京大学総合図書館「A〇〇/五八八四」	
						⑦天理大学附属天理図書館「九一三・六一/イ一七五」	
						⑧国立公文書館内閣文庫「一九三/五七九」	
						⑨静嘉堂文庫松井文庫「五三八/二二/二五一八〇」(四分冊)	

B		
(B1)	(A2)	
寛永十五	ナ シ	
ナ シ	ナ シ	
ナ シ	下二三、一五	
<p>① 国立国会図書館「ろ二九」</p> <p>② 宮内庁書陵部「一五四/四三六」</p> <p>③ 関西大学総合図書館「C/九一三・六一/A2/二」</p> <p>④ 都立中央図書館加賀文庫「四八九」(存下巻)</p> <p>⑤ 慶応義塾大学図書館「二一〇/八一」(存下巻)</p> <p>⑥ 早稲田大学図書館「八一三/一九三〇」(取合せ、上下巻共)</p> <p>⑦ 京都大学附属図書館「四一四〇/キ/三」</p> <p>⑧ 百合女子大学図書館「九一三・五一/A八九」</p> <p>⑨ 西尾市立図書館岩瀬文庫「九八/六」</p> <p>⑩ 東京大学国文学研究室「近世/三六一三/四」</p> <p>⑪ 大阪女子大学附属図書館「九一三・五/S」</p> <p>⑫ 京都大学文学部頼原文庫「Pb/一〇」の上巻</p> <p>⑬ 豊橋市中央図書館「一六〇/三」</p> <p>⑭ 岐阜大学附属図書館「九一三・四二/一・一」</p> <p>⑮ 大妻女子大学図書館「九一三・五二/A八九」</p> <p>⑯ 国文学研究資料館「ナ四/三六〇」</p> <p>⑰ 石川県立図書館李花亭文庫「八四〇/一七」の上巻も刷りの程度から(A2)であると思われる。</p>	<p>⑫ 京都大学附属図書館谷村文庫「四一四〇/キ」</p> <p>⑬ 中央大学国文学研究室「九一三・五/Sa三四」</p> <p>⑭ 早稲田大学図書館「八一三/一七〇三」</p> <p>⑮ 野村精一氏</p>	<p>* ⑩ 佐賀大学附属図書館鍋島文庫「〇九三/三」</p> <p>* ⑪ 香川大学附属図書館神原文庫「九一三・五一」</p>

D	C			
	(D)	(C2)	(C1)	
ナ シ	正保二	寛永十五	寛永十五	
ナ シ	杉田勘兵衛	ナ シ	ナ シ	
ナ シ	ナ シ	ナ シ	上三〇二〇	
	④ 東京大学史料編纂所「押し／一九」	④ 石川県立図書館李花亭文庫「八四〇／一七」の下巻	⑦ 東京国立博物館「〇三〇／と九九二一」 ⑧ 京都大学文学部頼原文庫「Pb／一〇」の下巻 ⑨ 実践女子大学図書館「九一三・五一／Ki八七」 ⑩ 名古屋大学附属図書館神官皇学館文庫「九一三・五一／A」	③ 早稲田大学図書館「へ一三／二七二二」 ④ 中央大学国文学研究室「九一三・五／Sa三四」 * ⑤ ソウル大学校中央図書館「三二一〇／一四」

表中、年記と書肆名記は省略して記し、通修箇所は第何丁部分かを示した。また、所在欄に*を付して記した本は、国文学研究資料館マイクロ資料によって版種を判断したもので、原本は見えていない。なお、敦賀屋久兵衛の書肆名記の有無による分類を行わなかった理由は、後述する。

十五行絵入本は、天和二年（一六八二）正月、鱗形屋三左衛門刊行で、管見に入ったのは日大総合図書館所蔵本（存下巻）一本のみである。

二 初版はどの版であるか

先ず、十一行本四版のうち、初版がどれであるかを確定したい。そのためには、各版からできるだけ刷りの早いと思われる本を選び、その版面ならびに本文を比較してみる必要がある。そこで(A1)の①慶大甲本、(B1)の⑦東大国文本、(C1)の④名大神宮皇学館本⁽¹⁾、(D)の④東大史料編纂所本を比較することにする。以下に、それぞれの序の部分掲げ、併せて簡単な解題を記す。

(A1) 慶大甲本「慶応義塾大学図書館 一〇X/二三五」

大本二冊。

表紙 菱形雷文繋ぎ・蓮華唐草文様空押しのある丹表紙。二七・五×一七・五糎。

題簽 表紙左肩に「清水物語上(下)」。

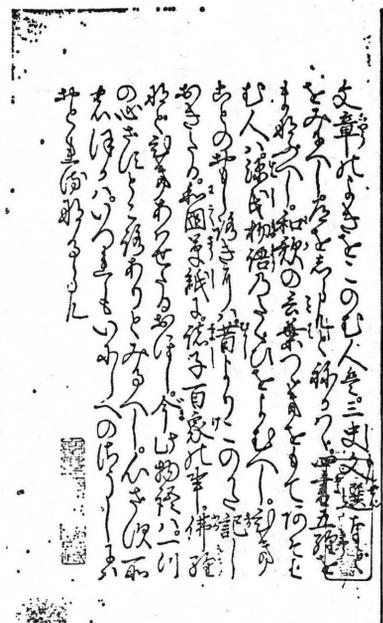
序 上卷一丁表。

内題 「清水物語上」(上卷二丁表)、「清水物語下向」(下卷一丁表)。

版心 「清水上 一(〳三十四終)」、「清水下 一(〳三十四終)」、但し上卷一丁の版心題はほとんど刷れて

おらず、丁付「一」も薄い。後印本に版心題・丁付共はつきり刷られているものがあるから、墨の付け落としと
思われる。

匡郭 なし。



(A1) 慶大甲本

字高 上卷二一・六種(二丁表本文初行)、下卷二一・

五種(一丁表本文初行)。

本文 每半葉一行、行一九字内外、句読点・振仮名

付刻。

丁数 上下卷共三四丁。

刊記 下卷三四丁表に本文が二行あり、更に二行分余

白を置いた後に「寛永拾五^戌十月吉且開之」。

また後表紙見返し中央に「洛陽四条坊門ノ教賀

屋久兵衛」とある。

印記 「英 王堂蔵書」(チェンバレン)、「慶応義塾図書館蔵」。

備考 この本は、印記のあるチェンバレンのほか、上田萬年、横山重の各氏が旧蔵したものである。

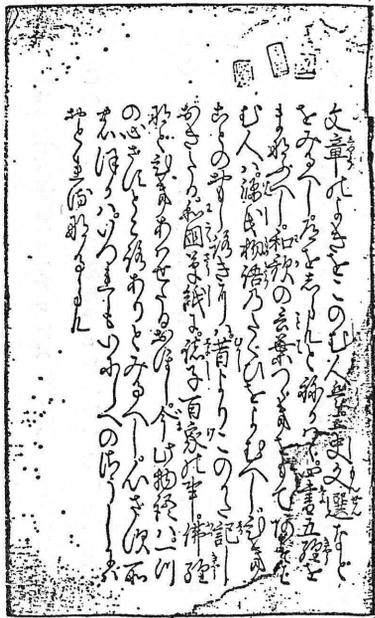
(B1) 東大国文本「東京大学国文学研究室 近世ノ三六一三ノ四」

大本二冊。

表紙 栗皮無地紙。二七・五×一八・一糎。

題簽 表紙左肩に貼付されるも、斑に剥落。字体は慶大甲本に極似するが、別版題簽。

序・内題・匡郭・本文は(A1)に同じ。



(B1) 東大國文本

印記 「東京帝／国大学／図書印」。

(C1) 名大神宮皇学館本「名古屋大学附属図書館神宮皇学館文庫 九一三・五一/A」
 大本二冊。

表紙・題簽 後補表紙で、更にその外側に保護表紙あり。題簽なし。

序・内題・版心・匡郭・本文・丁数は(A1)に同じ。

字高 上卷二一・五糧、下卷二一・五五糧。

刊記 年記は文言、位置共(A1)に同じで、書肆名記はなし。

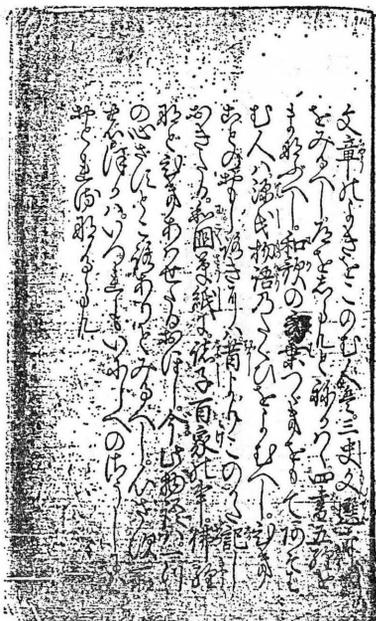
版心 (A1)に同じだが、上卷一丁には版心題・丁

付共なく、慶大甲本で下卷三四丁表である年記
 部分は後表紙見返しにされていて版心題・丁付
 共なし。但し後者は、後印本に版心題・丁付共
 刷られているものがある。

字高 上卷二一・五糧、下卷二一・四糧。

丁数 上卷三四丁、下卷三三丁。

刊記 年記の文言は(A1)に同じだが、前述の通り
 下巻後表紙見返しになり、書肆名記はなし。



(C1) 名大神宮皇学館本

印記 「神宮皇学／館大学／図書之印」、「名古屋／大
学／図書印」ほか。

(D) 東大史料編纂所本「東京大学史料編纂所 押き
／一九」

大本二冊。

表紙 黒色地紙に卍繋ぎ・唐草文様空押し。二六・一

×一八・〇糎。

題簽 上巻は剥落。下巻は表紙左肩に子持粹題簽「新
板

— 清水物語下 —

序 上巻見返し。

内題 (A1) に同じだが、上巻は一丁表(丁付は「二」)。

版心 「清水上 二(〜三十四終)」、「清水下 一(〜三十三)」。従って下巻本文最終二行は、後表紙見返し。

匡郭・本文は(A1)に同じ。

字高 上巻二〇・九糎、下巻二〇・八五糎。

丁数 上下巻共三三丁。

刊記・印記 なし。



(D) 東大史料編纂所本

備考 上巻後表紙見返し右下に「押小路家蔵本」と墨筆記あり。

序は、慶大甲本、東大国文本、名大神宮皇学館本では上巻一丁表にあるが、東大史料編纂所本では見返しにされ、右側に「清水上」という版心題と「一」という丁付が不自然に加えられている。これは、D版が覆刻版であることを示すと判断して良からう。またB版も、版面を丹念に見てゆくと、覆刻版であることが判る。東大国文本は全体に彫りが荒く、特に下巻で、

濁点を句読点のように「○」に近くしてしまった箇所が目立つからである。残った慶大甲本と名大神宮皇学館本は、共に整った版面を有する。版面だけではA版、C版のどちらが初版か決め難いので、両者の本文を比べてみることにする。

A版とC版の本文異同は、全部で二二例を数える⁽²⁾。そのうち振仮名の有無だけの異同は、一一例あった。A版にある振仮名がC版にないのは、次の一〇例である(〃で括った振仮名がC版にない)。

- 身^(む)のため^(ため)を^(を) (上一二表2)、我物^(わがもの)にして^(して) (上一六表2)、大勇^(おほいそ) (上一三〇表2)、来世^(らいせい) (下五裏4)、四百余州^(よひゃくよじゅう) (下二二裏7)、我^(わ)より^(より)下^(くだ)なる^(なる) (下一四表2)、くら^(くら)ます^(ます)所^(ところ) (下一四表6)、深山^(みやま)桜^(おう) (下一七表3)、運命^(うんめい) (下二二表5)、箕子^(きこ) (下二九表4)

逆にC版にある振仮名がA版にないのは、「侍」(上二裏1)一例しかない(、で括った振仮名がA版にない)。覆刻版では元の版にあった振仮名が落ちて少なくなるのが通例だから、C版の方を覆刻版と考えて良いのではないかと思う。即ち、初版はA版と判断できるのである。以下、各版の系統を考えてみよう。

ところで、覆刻版三版のうちB版の東大国文本は、装訂や料紙の質から、寛永年間もしくはそれをあまり下らない時期に上梓されたものと思われる。またC版も、後述するように寛永年間の刊行と推定できる。一方D版の東大史料編纂所本は、「新一清水物語下」という題簽を持ち、無刊記で字高がかなり詰まっていること等から、やや時代の下る覆刻版であると思われる。そこで先にB版とC版の系統を明らかにし、その後D版の系統を検討する。

B版は、初版としたA版との異同が最も少なく九例のみである。A—B間の異同とA—C間の異同は全く重ならないから、B版とC版は、いずれもA版を元にした覆刻と考えられる。残るD版は、A版との異同が最も多く三三例を数える。D版は先ず、B版に基づく覆刻ではない。A—D間の異同とA—B間の異同が全く重ならないからである。次にA—D間の異同とA—C間の異同は、(表2)に示した二箇所^所で一致する。即ち、「分別」の振仮名がA版は「ふんへつ」であるのに対し、C版とD版は「ふんいつ」であり、「箕子」の振仮名がA版は「きし」であるのに対し、C版とD版(表2) D版がA版と一致せずC版と一致する箇所

(A1)

(C1)

(D)

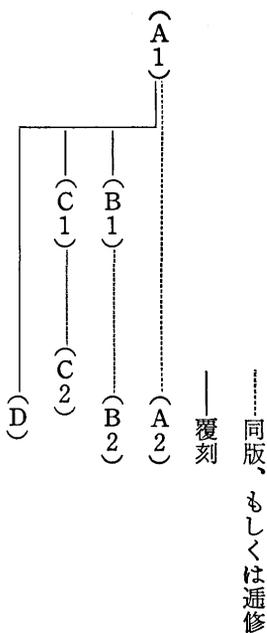
下二裏10 分別ぶんべつ 分別ぶんべつ 分別ぶんべつ

下二九表4 箕子きし 箕子きし 箕子きし

「分別」はA版の振仮名の「へ」が「い」と紛らわしい字体であり、「箕子」はA版ではっきりと刷れていなかった振仮名の一字が落ちただけだから、C版とD版のこの二箇所^所の一致は、偶然の産物と見做し得る。従って、D版はC版に基づく覆刻でもない。D版もまた、A版

を元にした覆刻と考えられる。同時に、この二箇所(3)の異同のわかり易さは、A版が初版であるという先の判断の傍証ともなる。

以上の検討をもとにして、十一行本四版間の系統を図示すると、次のようになる。A版が初版で、B版、C版、D版はそれぞれA版に基づく覆刻版である。



B版はA版との異同が少なく、逆にD版はA版との異同が多いという事は、既に述べた。二版とも、異同は振仮名の脱落や単純な彫り誤りがほとんどで、B版はA版の本文に比較的忠実な覆刻版、D版は雑な覆刻版と言える。一方C版の本文には、A版の本文の誤りを訂正し、かつ読み易くしようとする意志が感じられる。各版の本文の性格については、実例を示しつつ考察すべきところであるが、今回は紙数の制約があるので、別の機会に詳しく検討してみたい。

三 初版刊行書肆は敦賀屋久兵衛か

ところで先にも触れたが、(A1)に分類した①慶大甲本には、下巻三四丁表に「寛永拾五戊寅十月吉旦開之」という

刊年記があり、後表紙見返しに「洛陽四条坊門／敦賀屋久兵衛」という書肆名が刷られている。私が実見しえた敦賀屋の書肆名記を持つ十一行本は、この慶大甲本のみである。なお、実践女子大学図書館山岸文庫に同様な書肆名記を持つ一本がある由であるが、同本は現在修補中とのことで、まだ閲覧の機会を得ていない。今後の調査を待つこととする。

このように刊年記と別葉に書肆名を刷るのは、この時期の敦賀屋に独特の形式であることが、既に諸先学によって報告されている。そしてこの書肆名記は刊記ではなく、敦賀屋が求版した際のもの（伊藤正義氏⁽⁴⁾）、敦賀屋の売り分を示すもの（朝倉治彦氏⁽⁵⁾）といった解釈がある。一方、奥野彦六氏の『江戸時代の古版本』の寛永十五年版『清水物語』の項には、「横山重氏所蔵本」即ち現在の慶大甲本を初印本だとする横山氏自身の見解が引かれている。それ以降、『清水物語』の初版刊行書肆を敦賀屋久兵衛とする説がまま見られるが、そう判断して良いものであろうか。

確かに慶大甲本は、これまでに私が見ることのできたA版諸本中、②静嘉堂甲本と一、二を争う早い刷りである。問題なのは、この書肆名記の墨付きが本文や刊年記と異なり、別刷りであると見受けられることである。しかも、『棠陰比事物語』五季文庫本の書肆名記はこれと同版だと思われ、その使用が『清水物語』のみに止まらないことも明らかなのである。朝倉氏が繰り返し主張しておられる如く、敦賀屋の売り分としての売本に書肆名記が刷られた可能性のあることは、否定できない。

洛陽四条坊門

敦賀屋久兵衛

甲 大巻後
A1) 慶下見
本 表紙

また表章氏は、「正保耶查孟春吉辰」という刊年記を持つ観世流謡本、正保耶查本に、書肆名を敦賀屋久兵衛とするもの、西村又左衛門とするもの、村上平楽寺とするもの、杉田勘兵衛とするもの、及び書肆名のないものがあるが、いずれも同版でどれが初印か明らかにし難いことを報告され、「数店

が同一版木を共同で使用したものらしい」と述べておられる。⁽⁶⁾「正保耶查」即ち正保四年（一六四七）にこのような例が見られることから、『清水物語』の初版刊行書肆を敦賀屋に限定することは難しいと思われる。慶大甲本は初印本であるかもしれないが、敦賀屋の刊行であるかどうかは別に考えるべき問題と言えよう。それ故、先に示した（表1）では、敦賀屋の書肆名記の有無による分類を行わず、初版で寛永十五年の刊年記を持つ本はすべて（A1）としたのである。

なお、野田壽雄氏は「京四条坊門通／敦賀屋久兵衛」という書肆名記を持つ本があるとしておられ、⁽⁷⁾朝倉治彦氏は、刊年記と書肆名記が別刷りでない敦賀屋久兵衛版『清水物語』の存在を報告しておられる。⁽⁸⁾残念ながら、私はいずれも未見である。

四 通修本

A版とB版はそれぞれ伝本数が多く、版面がかなり読みにくくなっても行われた。いずれにも通修本が見られるので、それぞれから②京大谷村本と③東北大狩野本を取り上げ、紹介する。

（A2）京大谷村本「京都大学附属図書館谷村文庫 四―四〇／キ」
大本二冊。

表紙 濃縹色地紙に卍繋ぎ文様空押し。二六・三×一七・七種。

題簽 表紙左肩に貼付され、字体は慶大甲本に極似するが、別版題簽。

序・内題・匡郭・本文・丁数は(A1)に同じ。

版心 (A1)に同じだが、上巻一丁には版心題・丁付共なし。下巻五丁の丁付はほとんど刷れておらず、同一一丁の丁付は「十」、同一八丁と一九丁の版心題はいずれも「下」が削られ「清水」のみ、同三四丁には版心題・丁付共なし。

字高 上巻二一・四糧、下巻二一・三五糧。

刊記・印記 なし。

備考 下巻二三丁と一五丁は(A1)と別版。

A版諸本中(A2)に分類したものは、(A1)の「寛永拾五^戊十月吉旦開之」という刊年記が削られ、下巻の一三丁と一五丁だけが(A1)と別版であり、それはB版、C版、D版とも異なる。(A1)諸本中では遅い刷りのものと思われる⑨静嘉堂松井本を見ると、この二丁の版面が特に読みにくくなってしまうことが判るから、通修と判断したのである。また、(A1)の⑧内閣文庫乙本や静嘉堂松井本では序が見返しにされていたが、(A2)諸本では上巻一丁表に戻されている。

(B2) 東北大狩野本「東北大学附属図書館狩野文庫 狩／四／一一三九四」
大本一冊(上下巻合綴)。

表紙 菱形雷文繋ぎ・蓮華唐草文様空押ししの丹表紙。二四・五×一七・八糧。

題簽 表紙左肩に子持粹題簽「清水物語 上_下」、但し「下」は別押か。字体は慶大甲本に似ている。

序・内題・匡郭・本文は(B1)に同じ。

版心 (B1)に同じく上巻一丁および下巻三四丁には版心題・丁付共なし。但し下巻二丁の丁付はほとんど刷れておらず、同三一丁の丁付は「二十一」。

字高 上巻二一・二五種、下巻二一・一種。

丁数 上下巻共三四丁。

刊記 (B1)に同じだが、年記部分は後表紙見返しにされず、下巻三四丁表。

印記 「狩野氏図書記」、「東北帝/国大学/図書印」ほか。

備考 上巻一三丁から二〇丁まで(B1)と別版。

東北大狩野本は、上巻一三丁から二〇丁の八丁が(B1)と別版であり、それはA版、C版、D版とも異なる。(B1) 諸本中⑨早大乙本、⑩早大丙本、⑪中大乙本などでは、当該箇所がやや読みにくくなっており、東北大狩野本は遜修本であると判断する。

五 正保二年の年記を持つ本

次に、正保二年の年記を持つ本について考えてみたい。私がこれまでに見ることのできた正保二年の年記を持つ本は、石川県立図書館李花亭文庫所蔵の下巻本⑭のみである。

(C2) 李花亭文庫本「石川県立図書館李花亭文庫 八四〇/一七」
大本一冊(上下巻合綴)の下巻。

表紙・題簽 後補表紙で、左肩に書題簽「清水物語 全」。

内題・版心・匡郭・本文・丁数は(C1)に同じ。

字高 下巻二一・二五糎。

刊記 下巻三四丁表に「正保貳年五月吉日/杉田勘兵衛重新板」。

印記 「布地/遠香」(藤岡作太郎)、「寄贈/前田侯爵家/之記」、「石川県立/図書館/蔵書之印」ほか。



(C2) 李花亭文庫本・下巻34丁表

上に刊記部分を掲げたが、(C1)に見られる「寛永拾五
寅十月吉旦開之」という年記を削った跡らしい汚れが、杉田
刊記の上方にあるのが確認できる。杉田刊記は、埋め木され
たもので、正確には求版記とでも言うべきであろう。杉田勘
兵衛は、板木を入手して自家の刊記を加える求版の常習者だ
が、この李花亭文庫本もその例に洩れないわけである。

李花亭文庫本の刷りは、(C1)の⑧東京国立博物館本な
どと比較すると、かなりくたびれた感じがする。正保二年五

月というところ、初版刊行から約六年半たった時点であり、その前年の十二月に寛永から正保へ改元されている。C版の刊行が寛永年間であったとほぼ特定できるのと同様に、寛永末年頃までの『清水物語』の盛行ぶりがここに窺われる。

ところで、『清水物語』に正保二年の年記を持つ本が存在することは、李花亭文庫本旧蔵者である藤岡作太郎氏を含め、諸先学が報告しておられる。しかし、それが杉田勘兵衛の刊記であるとする報告は、見当らない。中村幸彦、木村三四吾の両氏は、『近世文学未刊本叢書・仮名草子篇一』の解題で「再版本には正保二年五月吉日出雲寺和泉掾とあるといふ」とされ、青山忠一氏⁽⁹⁾、野間光辰氏もそれに従っておられる。私は、杉田勘兵衛求版本と年記の文言が同一で、書肆名を「出雲寺和泉掾」と記す本を見ていない。『国書総目録』の『清水物語』正保二年版の項目によると、李花亭文庫本のほかに横山重氏旧蔵本が存するようで、これが出雲寺の刊記を持つ本かもしれない。⁽¹¹⁾

因みに、⁽¹²⁾国会図書館本下巻後表紙見返しには次のような保科伯成の識語がある。即ち伯成は、B版である国会図書館本の寛永十五年の年記のすぐ左に「洛陽四条坊門／敦賀屋久兵衛」と墨書し、更にその左下に細字で次のように記している。

此書凡三板、正保貳年五月吉日御書物屋出雲寺／和泉掾、又一板ハ元禄二己歳九月吉日洛陽錦小／路新町西へ入町永田長兵衛開板、其一板ハ此本也。／此本尤古板、去今一百九十五年也。／天保二年辛卯六月望記 保科紹

天保二年（一八三一）の百九十三年前が寛永十五年（一六三八）であるから、伯成は、『清水物語』に寛永十五年版、正保二年出雲寺和泉掾版、元禄二年永田長兵衛版の三版があると認識していたわけである。保科伯成は西条藩の奉行で、松崎慊堂の講義を受けたという。⁽¹³⁾国会図書館本上巻見返しには「往日慊堂先生見示此書借来／一過読頃日購一部校字而返云」と記されており、考証学の徒であつたらしい。従つて、この識語もある程度信用していいのかもしれない。

が、原本未見であるので後考を待つことにしたい。

さて、出雲寺の刊記を持つ本が存在するとすれば、それはどの版であると考えられようか。野間光辰氏はこれを初版の後印本とされたが、⁽¹⁴⁾初版であるA版、あるいはB版だとは考えにくい。この両版には、寛永十五年の年記を持ちながら料紙の質のかなり落ちる、恐らく正保より後の刷りと思われる本があるからである。またD版の開版も、正保よりは下った時点であろうと思われる。してみると、出雲寺の刊記を持つ本は、杉田求版本と同じC版か、本稿では報告し得なかった未知の版ということになる。杉田勘兵衛の営業が慶安年間までしか確認できないことと、⁽¹⁵⁾出雲寺和泉掾の刊記の古いものが慶安末年までしか遡れないこととを⁽¹⁶⁾考え合わせると、出雲寺の刊記を持つ本は、杉田が求版したC版の板木を出雲寺が再求版したものの、もしくは杉田求版本を元にして出雲寺が新たに刻した未知の版と考えることもできよう。

六 十五行絵入本

最後に、十五行絵入本について考察してみようと思う。先ずは、管見に入った日大本の最終丁裏の刊記部分を掲げ、問題を記すことにする。

(E) 日大本「日本大学総合図書館 九一三・五一/A八九a」
大本、存下巻。

表紙 濃縹色無地紙。二七・〇×一八・八厘。



日大本・下巻16丁裏

題簽 表紙左肩に子持粹題簽「新一きよ水物かたり」(下部破

損のため「物かたり」の下に「下」とあるかどうか不明)。

内題 「清水物語下向」(一丁表)。

版心 「しゅんれい 下一(下十六)」、但し一四丁の

丁付は「下十三」。

匡郭 四周单边、無野。二二・六×一六・八糎。

本文 每半葉一五行、行三〇字内外、振仮名付刻。

挿絵 二丁表、七丁表、一三丁表。

丁数 一六丁。

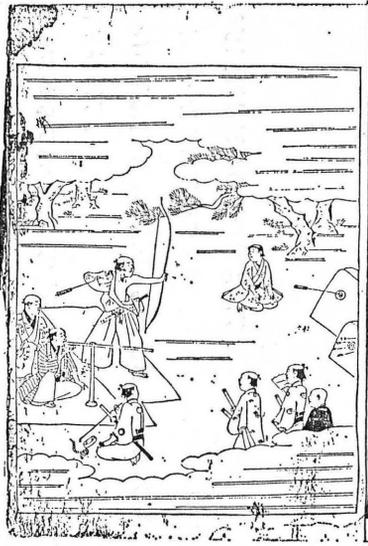
尾題 「清水物語下向終」(一六丁裏)。

刊記 「天和二壬戌正月吉日／大傳馬三町目／鱗形屋三左衛門板」(一六丁裏)。

印記 「武笠文庫」(武笠三)、「日本大／学図書／館蔵書」ほか。

日大本は下巻のみで、上巻の存在は確認できなかったが、版心題が「しゅんれい」となっているから、「巡礼」と「翁」が問答を展開する上巻も一緒に刊行されたのであろう。

十五行絵入本の刊行書肆である鱗形屋三左衛門は、貞享四年(一六八七)刊行の江戸案内記『江戸鹿子』巻六に、浄



日大本・下巻13丁表（第3図）

瑠璃本屋と紹介されている。この期に江戸で鱗形屋を名告る書肆は数軒あるが、井上隆明氏はこの三左衛門を鱗形屋の元締としておられる。¹⁾所在地が同じで、書肆名を「うろこかたや」或いは「鱗形屋」とのみ記す刊記を有する書物も、同一書肆の刊行と考えて良いかもしれない。鱗形屋は、『私可多咄』（寛文十一年）、浅井了意の『堪忍記』（同上）、『糺物語』（延宝五年）、『竹斎』（題簽は^入絵下り竹斎、天和三年）、『薄雪物語』（刊年不明）、『日本二十四孝』（同上）、『ひそめ草』の改題本『鸚鵡新徒然草』（同上）等の仮名草子を絵入りで刊行しているが、いずれも新作ではない。仮名草子に限って言えば、上方で実績を上げた作品に挿絵を入れるなど、装いを改めて江戸版として出すことを繰り返した書肆であり、『清水物語』も同様の形で刊行されたわけである。

十五行絵入本の版面は、行数が増えたのみならず、細かい字が匡郭上下一杯まで詰め込まれ、句読点は省略されている。その結果、十一行本では三十三丁と二行であった下巻本文丁数が、半葉を用いた挿絵三枚を含めて十六丁弱に減っている。その本文は、脱落や重複が多くて意味の通らない箇所もある、かなり杜撰なものである。

さて、ここで上の挿絵に注目していただきたい。日大本には絵師の名が記されていないが、菱川師宣風の挿絵である。菱川師宣は、延宝から元禄にかけて度々、鱗形屋から絵本を刊行している。従って、十五行絵入本の画工は師宣であってもおかしくはないのだが、事は慎重を要するようである。師

宣ら浮世絵師の下に「板木下絵師」と称される浮世絵師の子備軍的な職人集団が存在したことを、佐藤悟氏が報告しておられるからである。⁽¹⁸⁾ いわば師宣工房のようなものが想定できるのであり、十五行絵入本の挿絵は師宣風であると言うに止めたい。

ところで、佐藤氏は別に、天和二年十二月の江戸大火による師宣絵本の板木焼失の仮説を立てて、鱗形屋も大火の被害を蒙ったのではないかと推測されている。⁽¹⁹⁾ 十五行絵入本の板木も天和大火の際に失われたとすれば、それが伝本の少ない理由であるのかもしれない。

おわりに

以上、『清水物語』の諸版について、その系統、関わりのある書肆、挿絵等の検討を行って来た。十一行本について言えば、各版の刊行書肆と、それに絡んで敦賀屋久兵衛の書肆名記の意味、出雲寺和泉掾の刊記を持つ本の存在等明らかにすることができなかった。更に付け加えれば、保科伯成が記す元禄二年永田長(調)兵衛版、あるいは元禄九年刊『増書籍目録大全』以下の書籍目録の『清水物語』の項に記されている「秋田清」⁽²⁰⁾、即ち秋田屋清兵衛の関わりについても、今述べる材料を全く持たない。各版をめぐる書肆の動向は、その大部分が依然として謎に包まれているのである。

とはいえ、寛永年間に十一行本中A版、B版、C版の三版が恐らく並行して行われ、しかも(C2)の正保二年杉田勘兵衛求版本の版面がかなり摩滅していることは、『祇園物語』が伝える『清水物語』の売れ行きをある程度裏付けるものと言えるのではあるまいか。『清水物語』は、確かに当代に好評を博した書物だったのである。

- (1) (C1) 諸本中最も早い刷りと思われるのは⑦東京国立博物館本であるが、ここでは写真が手に入った名大神宮皇学館本を取り上げることとする。因みに、東京国立博物館本は丹表紙本だが、原題簽は持たない。字高は上下巻共二一・六糎である。
- (2) 清濁の差、句読点の有無については、本文解釈上問題となりそうなものについてののみカウントした。以下、B版、D版についても同様である。
- (3) (D) は下巻一三丁裏で、慶大甲本にある振仮名が二箇所落ちてゐる。それは(A1) 諸本中刷りの遅い⑨静嘉堂松井本も、通修本である(A2) の⑬中大甲本とも一致する。(D) は(A2) に基づく覆刻である可能性もあるが、同一五丁裏を見ると、(A1) にあり(A2) にない句読点が(D) にある。この甚だ頼りない根拠により、とりあえず(A1) に基づいたものとした。
- (4) 伊藤正義氏「謡抄考(中)」(『文学』四五—一二、昭52・12)
- (5) 朝倉治彦氏『未刊仮名草子集と研究(一)』(昭41 未刊国文学資料刊行会)の『棠陰比事物語』の解題。また、『仮名草子集成』第九卷(昭63 東京堂書店)の『大坂物語』の解題では「扱った本に押したと解釈できるかもしれない」としておられる。
- (6) 表章氏『鴻山文庫本の研究・謡本の部』(昭40 わんや書店)の二八一頁。
- (7) 野田壽雄氏『日本近世小説史・仮名草子篇』(昭61 勉誠社)の一六八頁。
- (8) 『仮名草子集成』第九卷前掲箇所。
- (9) 青山忠一氏『統清水物語』をめぐって(『近世文学論叢・中村俊定先生古稀記念』昭45 桜楓社)
- (10) 『日本古典文学大辞典』第二巻(昭59 岩波書店)の『清水物語』の項。
- (11) 他に、平成二年正月の『中尾松泉堂古典目録』に、幕末の国学者矢盛教愛旧蔵の『清水物語』下巻が出ていて、「正保二年杉田勘兵衛刊」と書かれているが、李花亭文庫本と同じ杉田勘兵衛求版本だと思われる。
- (12) 句読点は私にほどこした。
- (13) 鈴木端枝氏「『棟堂日曆』主要人物索引並びに解説」(『安田学園研究紀要』二〇、昭55・2)
- (14) 『日本古典文学大辞典』前掲項。
- (15) 慶安四年に『大日経疎抄』があると聞くが、確認できたのは慶安二年の『目覚し草』など。

(16) 国会図書館所蔵の『法華経秘伝鈔』に慶安五年の刊年記がある。慶安五年は正保二年の七年後である。但し、出雲寺はそれ以前から刊年を記さずに出版を行っていたものと思われる。

(17) 井上隆明氏『近世書林板元總覧』(昭56 青裳堂書店)の鱗形屋三左衛門の項。

(18) 佐藤悟氏「菱川師宣の再検討」(「たばこと塩の博物館研究紀要」四、平3・3)

(19) 平成元年度日本近世文学会秋季大会における口頭発表。

(20) 慶応義塾大学
附属研究所 斯道文庫編『江戸書林出版書籍目録集成』(昭37)39 井上書房)による。

付記

本稿は、平成三年度前期の慶応義塾大学国文学研究会における口頭発表をもとにまとめたものである。席上御教示賜った諸先生方に厚く御礼申し上げる。また、御所蔵本を快く閲覧に供して下さった野村精一先生、渡辺守邦先生、並びに公私の文庫、図書館の方々に、深甚の謝意を捧げる次第である。